

河口慧海に梵語文法を教授したクルマン博士

吉 崎 一 美

1. 問題の所在 東京大学所蔵梵語写本 No.410, Sad-dharma-puṇḍarika-sūtra (慧海収集本) の末尾第 194 葉 b 面左欄外に, 「明治三十八年五月十日ヨリ (パルポ) 族ノクルマン／博士ニ就イテ本経ノ句読ヲ習始メ全年九月／十□日習了ス全句点ハ (?) 全博士ノ附 (?) ス (?) 処 (?) ナリ (?) / 比馬羅耶山ネパールニテ (?) 河口慧海」との書き込みがある (／は改行, □は判読不能, カッコ内の ? は奥山直司氏の教示 [2008.8.23] を得た吉崎の読みを示す). 同年 6 月 10 日にブッダ・バツザラ師から贈られた木彫観音像 (東北大学 [河 1-031]) の朱書銘と対比して, これを慧海の自筆と判断する. この書き込みから, 「クルマン博士」は仏教梵語に精通した学者であったと推定される. また慧海はネパールで維摩経の梵語原典を探索する際に, 西藏語訳に挙げられた梵語の経題が「同國存在の佛教梵典目録」, すなわち「クルマン・パンデットの梵書目録に載ってゐること」を確認している ([河 1928: 23]) から, 「クルマン博士」は, ネパールの梵語写本について, とりわけ仏教写本について, 信頼するに足る目録を所持していたことになる¹⁾. 「博士」はパンディットに対応するだろう. またチベット語の「パルポ」Bal-po は「ネパールおよびネパール人」を意味するとされるが, 実質的には「カトマンズ盆地, およびその先住民族であるネワール人」を指す.

2. 人物の特定 「クルマン博士」とはいかなる人物であったのか. 「クルマン」のローマ字表記は Kul mām であろう. 末尾の母音 a はしばしば略して発音されるので, Kul mām の正式な表記は Kula māna となる. 当時の諸記録から, 明治 38 年 (西暦 1905 年 ≡ ネワール暦 [N.S.] 1025 年 ≡ ヴィクラム暦 [V.S.] 1962 年) 前後のカトマンズ盆地に, Kula māna (Kul mām) の名を持つ複数のネワール人が確認できる. 煩を厭わずに, 先ずそれら個々の記述を列挙しよう. 直ちに同一人物と判定できない場合は, グループ b 以下に挙げる. また紙数の制約から, 書誌情報の一部を割愛する.

①ムスン・バハのクラ・マーナ・ヴァジュラーチャールヤ [1a-1] Kula māna

(12) 河口慧海に梵語文法を教授したクルマン博士 (吉 崎)

Vajrācārya (Musuṃ bahā): ネワール暦 1023 年に、スヴァヤンブーの鬼子母神堂前に、黄金色の金剛薩埵像を乗せた石柱を建立した ([HR(1)-310] [HR(2)-304, 609/237]). [1a-2] Kula māna Vajrācārya (Musuṃ bahā): ネワール暦 1026 年に、スヴァヤンブーの文殊霊場へ向かう階段に、文殊とサラスヴァティーの像を安置した ([HR(1)-649/243-244]). [1a-3] Kula māna Vajrācārya: ネワール暦 1038 年にカトマンズ市内タ・ナニ Taḥ-nani のディーパンカラ像を制作した ([HR(3)-151/91]). [1a-4] Kula māna Vajrācārya guruju (Yeṃ Brahma-tole Maṇisaṃgha-mahāvihāra Musuṃ-bāhāyā Taḥ-nani): ネワール暦 1040 年にブイケルでサンミャク大布施を開催した ([HR(3)-56]).

② マカン・バハのクラ・マーナ [2a-1] Kul mān (Makhan bahā): ネワール暦 1027 年にスヴァヤンブーへ旗印を奉納した ([HR(1)-649/247]). [2a-2] Kul mān (Makhan bahā): ヴィクラム暦 1990 年に、スヴァヤンブーのシャーンティプル近くにある阿闍仏を修復した ([HR(2)-615/276]). [2b-1] Kula mān (Vajrācārya, uttarācārya, Makhaṃ-vāhāla): ネワール暦 991 年に写本 Ahorātra-jajña-vidhi ([ASK.DP, no.2393]) を書写した。

③ クラ・マーナ・シンハ比丘 ネワール暦 1020 年にイトウン・バハの Harṣa vīra siṃha Tulādhār の末子として生まれる。ラサ在住の交易商人から転じてチベット仏教僧になり、さらにテラヴァーダ仏教に改宗した。彼はヴァイディヤ医師でもあった。その生年から、彼は本稿とは無関係と思われるが、念のために紹介しておく(典拠省略)。

④ クラ・マーナ・シン・ヴァジュラーチャールヤ [4a-1] Kul māṃ: パタンのパンディト。ガンターガル・ライブラリー (ビール・ライブラリーの別称。ダルバル・ライブラリーとも称した。国立古文書館の前身) のアディヤクシャ (adhyakṣa = chief, master, director, supervisor: 館長)。若き日のニシュターナンダ・ヴァジュラーチャールヤに梵語文法書『サーラスヴァタ・ヴィヤーカラナ』を講義した ([Siddhānanda 1131: 1]). [4a-2] Kula māṃ paṇḍita: ガンターガル・ライブラリーのアディヤクシャ。ニシュターナンダ・ヴァジュラーチャールヤに『サーラスヴァタ・ヴィヤーカラナ』を講義した ([Hṛdaya 1102: 27, 30, 35, 36]). [4a-3] Kula māna: パタンのパンディト。ネワール暦 1030 ~ 1040 年にビール・ライブラリーのアディヤクシャとして在職した ([Tamot 1100: 12]: ただしそれ以前から館員として在職していたと思われるが、正確な在職期間は今のところ不明である)。[4a-4] Kula mān siṃha paṇḍita: パンディトのクラ・マーナ・シンの監督のもと、パンディトのラトナ・バードル・ヴァジュラーチャールヤはビール・ライブラリーで教育を受けた ([HR(1)-380] [HR(2)-369]).

[4a-5] Kula māna simha: ビール・ライブラリーの学者。ラージャ・パンディト。パンディトであったラトナ・バードル・ヴァジュラーチャールヤの母方の祖父。若き日のラトナ・バードルは、クラ・マーナ・シンから仏教学の個人教授を受けた ([Bu Baha, p.153]). [4a-6] Kula man pandit: 西暦 1898 年 (N.S.1018) にカトマンズ盆地を訪れたシルヴァン・レヴィは、彼 (Pandit Kula Man of Patan) を「仏教学の名誉」あるいは「(仏教学者の) 頂飾 cūḍāmaṇi」と称賛し、梵語による讃辞を贈るとともに、懇ろに写本の探索を依頼した ([Levi 2006: 32, 41-42, 47, 52]). [4b-1] Kula māna Vajrācārya (Dharācāyā): ネワール暦 998 年にパタンのイ・バハが修復された際に、Dharācā のクラ・マーナ・ヴァジュラーチャールヤはその維持に関する取り決めの証人になった ([Bu Baha, p.197, no.49]: Manik Vajrācārya 氏の教示 [2009.3.11] によれば、ビール・ライブラリーのパンディトであったクラ・マーナ・シン・ヴァジュラーチャールヤの住まいは、パタンの Nāg bahā にほど近い Dhalayecā にあった). [4c-1] Kula māna Vajrācārya (Nākhā-cuka-nani) は、ネワール暦 985 年に写本 Caryā-gīti を書写した ([LIENHARD, no.123]: Nākhā-cuka-nani は Nāg bahā に隣接する地名である).

⑤その他のクラ・マーナ²⁾ [5a-1] Kula māna sim Vajrācārya (in Lhasa, Yala Vuddha-jaśodharā-mahāvihāra, Nhulacheyā), N.S.979, a painting of Tārā and Maitreya in the Akimoto Collection ([Yoshizaki 2004: ⑤]). [5b-1] Kula mān, N.S.986, Ādipadma-mahāvihāra toraṇa ([Bhadra ratna 2004: 115, no.9]). [5c-1] Kula mān (vaidya, son of Vi nalasim Vajrācārya vaidya, Jaśodhara-mahāvihāra), N.S.1002, construction of a big vajra ([Bu Baha, p.198, no.52]). [5d-1] Kula māna Vajrācārya (Nādhālayā?), N.S.1005, Ekallavīrākhye caṇḍamahāroṣaṇa-tantra ([ASK.KY. card 1671]). [5e-1] Kula ma (?) ... Vajrācārya (Hiraṇyavarṇa-mahāvihāra), N.S.1010, Samyak mahādāna ([Yoshizaki 2008, No. 5]). [5f-1] Kula māna (dutiya putra of J[a]mādār sura vira), N.S.1011, Cīthu gaṇeśa pāṭi ([Kīrtipur 2057, no.147]). [5g-1] Kula māna (of Svayambhū, subordinate to Sthavira Teja pati), N.S.1016, the renovation of a minor shrine to the east of Svayambhū mahācaitya ([HR(2)-302]). [5h-1] Kula māna (lekhaka sācī), N.S.1017, Devajoti-vihāra abhilekha ([Bu Baha, p.205/64]).

3. 結論 これら複数の「クルマン」たちを検証した結果、④のクラ・マーナ・シン・ヴァジュラーチャールヤが、慧海による「クルマン博士」の記述に最も良く符合する。若き日のニシュターナンダ・ヴァジュラーチャールヤは、彼に就いて梵語文法を学んだ。また少年期のラトナ・バードル・ヴァジュラーチャールヤ (ネワール暦 1013 年生) は、母方の祖父にあたる彼に師事して、梵語文法、仏教論理学、ならびに韻律学などの基礎を学んだ ([吉崎 2007: 45]). 後にカトマンズと

(14) 河口慧海に梵語文法を教授したクルマン博士 (吉 崎)

パタンを代表することになる二人の学者は、ともにこのクラ・マーナ・シンを師と仰いだ。一方、ビール・ライブラリーのパンディットとして、彼は西暦 1898 年（ネパール暦 1018 年）にレヴィから写本探索の依頼を受けた。このように彼は梵語文法の権威であり、また写本探索のキャリアがあった。

およそ十ヶ月にわたるカトマンズ盆地滞在中に、慧海は定期的に「クルマン博士」に就いて梵文法華經の講義を受けるかたわら、精力的に梵語写本を収集した。ネパール政府有力者による写本収集とは別に、慧海も自ら寺や旧家を訪ね歩いて収集の交渉を重ねた。「クルマン博士」がクラ・マーナ・シン・ヴァジュラーチャールヤであったとすれば、彼が慧海への定期的な個人教授のかたわらで、慧海自身の写本収集活動にも有益な助言を与え、時には何らかの具体的な援助を施したと考えても不思議ではないだろう。写本の所在とその所有者に関する具体的な情報を持つ彼の協力があったからこそ、慧海は短期間に個人的にも大量の写本を収集できたと考えられる。

クラ・マーナ・シン・ヴァジュラーチャールヤの生涯と業績については、ネパールでも本格的な調査がなされておらず、正確な生没年も明らかでない。ネパール暦 978 年生まれの新シュターナダへの講義が彼の少壮期のエピソードであるとするれば、ネパール暦 1025 年（西暦 1905 年：慧海への講義）は彼の生涯の円熟期にあたる。ラトナ・バードルへの教育はこの時期であった。さらにタモットによれば、ネパール暦 1030 年から 1040 年の間、彼はビール・ライブラリーのアディヤクシャとして在職したから、彼は学者としてのみならず、組織の管理運営にも有能であったと想像される³⁾。吉崎の要請を受けて、ネパール史学の権威であるバドラ・ラトナ・ヴァジュラーチャールヤ博士（[Bhadra ratna 2004] の編者）は、曾祖父の調査を約束してくださった（2011.8.15）。博士は彼の曾孫にあたる。以上、「クルマン博士」について、本稿では現時点で考え得る一つの仮説を提示するに留め、将来の成果を待つこととする。

1) 「クルマン博士の梵書目録」はハラ・プラサド・シャストリのカタログ（[Śāstri 1905/1915]）と何らかの関連があるかもしれない。維摩經への言及はその第二巻（1915）に見られる。2) 以下の諸人物を英文で紹介する。吉崎が制作中の“An Index of Personal Names in Newari Historical Materials”（仮題）の内容見本を示すためである。この人名索引は、写本奥書、絵画銘文、碑文、土地売買文書などを典拠にして、現在までに延べ約二万五千人分のデータを収録している。本稿はそれに基づく成果の一部である（本稿では全データを提示していない）。3) 慧海は大正 2 年（西暦 1913 年≡ネワー

ル暦 1033 年) にも、短期間ながら、高楠順次郎・長谷部隆諦とともにカトマンズ盆地に滞在し、写本収集に励んだ。この間に長谷部は、「輪城 (パタン市) のクワ寺 (Kuva-vihār 即ち Hiranya-varna-vihār) にてクルマンと云ふ政府御かかへの梵学者にして僧侶なる人の護摩修法を見た」と記している ([長谷部 1930: 116–117])。

〈略号〉

[河口 1928]: 河口慧海『梵藏対照國譯維摩經』(『河口慧海著作集』第十卷所収・うしお書店, 1928). [長谷部 1930]: 長谷部隆諦「尼波羅入国記」(松長有見編輯『長谷部水哉遺稿集』所収・長谷部隆諦師遺稿刊行会, 1930). [吉崎 2007]: 拙稿「パンディト・ラトナ・バードル・ヴァジュラーチャールヤが書写したネワール仏教写本」『印度学仏教学研究』56-1, 2007, pp.45–49. [ASK,DP]: Research cards of [ASK,DP,KY] (unpublished). [ASK,DP,KY]: Kazumi Yoshizaki, ed., *A Catalogue of the Sanskrit and Newari Manuscripts in the Asha Archives (Asha Saphu Kuthi), Cwasa Pasa, Kathmandu, Nepal, Part II*, Kumamoto, Kurokami Library, 2002. [ASK,KY]: Kazumi Yoshizaki, ed., *A Catalogue of the Sanskrit and Newari Manuscripts in The Asha Archives (Asha Saphu Kuthi), Cwasa Pasa, Kathmandu, Nepal*, Kumamoto, Kurokami Library, 1991. [ASK,KY card]: Research cards of [ASK,KY] (unpublished). [Bu Baha]: Loṭas Risarc Senṭar, ed., *Vidyādhara Saṃskṛita Yośodhara Mahāvihāra Saṃgha Chagū Adhyayana*, Yala, N.S. 1113 (V.S. 2050, A.D. 1993). [HR(1)]: Hema rāja Śākya, *Śrī Svayambhū Mahācaitya*, Kathmandu, N.S. 1098. [HR(2)]: Hema rāja Śākya, trans. Min Bahadur Shakya, *Śrī Svayambhū Mahācaitya, The Self-Arisen Great Caitya of Nepal*, Kathmandu, 2004 (N.S. 1124). [HR(3)]: Hema rāja Śākya, *Samyak Mahādān Guthi*, Kathmandu, N.S. 1100. [Hṛdaya 1102]: Citta dhara “Hṛdaya,” *Jhigu sāhitya*, Yem, N.S. 1102. [Levi 2006]: Harihar Raj Joshi & Indu Joshi, *Nepal—A Notebook of Sojourn by Sylvain Levi*, Kathmandu, 2006. [LIENHARD]: Siegfried Lienhard & Thakur Lal Manandhar, *Nepalese Manuscripts, Part I: Nevāri and Sanskrit*, Stuttgart, 1988. [Śāstri 1905/1915]: Hara prasād Śāstri, *A Catalogue of Palm-Leaf & Selected Paper Manuscripts Belonging to the Durbar Library, Nepal*, 2 vols., Calcutta, 1905/1915. [Siddhānanda 1131]: Siddhānanda Bajrācārya, *154 kvaḥgu gadyaguru paṃ. sva. Niṣṭhānanda Bajrācāryayā budimyā lastāy 2031/9/23 gate pidamgu saṃkṣipta jīvanī va bihām culī*, Kathmandu, N.S. 1131. [Tamot 1100]: Kāśī nātha Tamot, *Siddhi ratna Kasāḥ va vaykayā kṛti*, Kathmandu, N.S. 1100. [Yoshizaki 2004]: 拙稿「ネワール語銘文を持つチベット仏教絵画について」『密教文化』第 213 号, 2004, pp.21–43. [Yoshizaki 2008]: 拙稿 “The Samyak Mahadana Ceremony in Svayambhu, Kathmandu, Nepal: Photos taken by Mr. Ciniya Tamrakar in 1980, and an Essay based on the research carried in 1993 by K. Yoshizaki” (in Japanese, under construction in my web-site).

〈キーワード〉 ネワール仏教写本, 河口慧海, クルマン博士, Kula māna siṃh Vajrācārya (東洋大学大学院修了)